

和語起源の動詞と競合する尊敬語構文

ジョージタウン大学 [院] / 駿河台大学

山田彬堯

1 イントロダクション

日本語には、(1) と (2) に示されるように、複数の尊敬語構文が競合している。このうち、(2)b のように和語を用いた「…なさる」は容認度が落ちるとされている (菊地 1997; Yamada to appear)。本研究は、この点を検証するために、とりわけ (2)b と d の対比に注目し、構文交替における確率的な傾向を、Yamada (2019) で提案された一般化線形混合効果モデルに立脚した定量的なアプローチに基づいて明らかにする。

- (1) a. A 先生は B さんに相談された。 (2) a. A 先生は B さんに話された。
b. A 先生は B さんに相談なさった。 b. ?A 先生は B さんに話しなさった。
c. A 先生は B さんにご相談なさった。 c. A 先生は B さんにお話しなさった。
d. A 先生は B さんにご相談になった。 d. A 先生は B さんにお話しになった。

尊敬語表現の研究には、大きく二つの潮流がある。一つ目は、西洋に端を発する理論言語学 (統語論、意味論、語用論) に立脚したものである。例えば、生成文法では、尊敬語表現を述語と主語の間的一致現象と見なすことで、性数の一致を持たない「一見すると一致を持たない言語」に存在する「一致現象」として尊敬語構文は解釈されてきた (Niinuma 2003; Boeckx and Niinuma 2004; Kishimoto 2010; Thompson 2011)。実際に尊敬語表現が一致として扱われるべきかどうかはさておき、これらの立場は専ら (1)d/(2)d に示された「御…になる」にのみ焦点を当ててきたため、異なる尊敬語表現にどのような競合関係が存在するのかという点については (目下) 詳しく分析されていない。

二つ目の流れは、伝統的な国語学の系譜であり、史的な発展に加え、緻密な内省判断から共時相における構文の選択の傾向が議論されてきた。例えば、a の「ラレ尊敬」は、やや敬意の度合いが落ちる傾向があること、b の「…なさる尊敬」は、和語起源の動詞で容認度が下がることなどが一般的な傾向として指摘されている (菊地 1997 など)。

しかし、実際のデータなどを調べてみると、「立派になりなさったけど (BCCWJ)」「洪水という罰を与えなさったのですか? (インターネット)」のように和語動詞が「…なさる」を取る事例も見受けられる。統計モデリングという定量的な視点を組み入れながら「御…になる」と比較した際の「…なさる」の特殊性を調査し、競合する尊敬語構文研究の一側面を議論することが本稿の目的である。

2 データと記述統計的解釈

2.1 使用したデータ

まず初めに (1)/(2)b-d の三つの構文がどのような割合で使われているのかを BCCWJ を用いて調査した。ここでは、「中納言」を利用し下記の検索式によって得られる計 14,062 例を取得した (「ラレ構文」は、受け身をはじめとするその他の意味機能との区別が困難

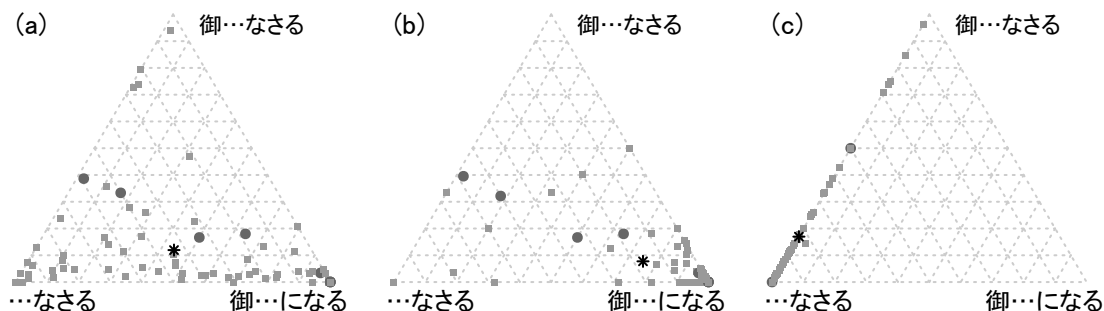


図 1: 各動詞の選択傾向: (a) コーパス全体での傾向、(b) 命令文以外に限ったときの傾向、(c) 命令文における傾向

であるため、今回の考察対象から除外した)。

- (3) a. キー: 品詞 LIKE ” 名詞-普通名詞-サ変可能 %” AND 前方共起: 語彙素=” 御” ON 1 WORDS FROM キー AND 後方共起: 語彙素=” に” ON 1 WORDS FROM キー AND 後方共起: 語彙素=” 成る” ON 2 WORDS FROM キー 2,036 件
- b. キー: (品詞 LIKE ” 動詞 %” AND 活用形 LIKE ” 連用形 %”) AND 前方共起: 語彙素=” 御” ON 1 WORDS FROM キー AND 後方共起: 語彙素=” に” ON 1 WORDS FROM キー AND 後方共起: 語彙素=” 成る” ON 2 WORDS FROM キー 3,623 件
- (4) a. キー: 品詞 LIKE ” 名詞-普通名詞-サ変可能 %” AND 後方共起: 語彙素=” 為さる” ON 1 WORDS FROM キー 1,109 件
- b. キー: (品詞 LIKE ” 動詞 %” AND 活用形 LIKE ” 連用形 %”) AND 後方共起: 語彙素=” 為さる” ON 1 WORDS FROM キー 7,294 件

2.2 記述統計と使用傾向の解釈

(1) 全体の傾向: この結果、5,659 例の「お／ご…になる構文」、7,047 例の「…なさる」、1,356 例の「お／ご…なさる」を得た。40.24%: 50.11%: 9.64% という割合から、全体としては、前者二つの構文がよく使われる傾向にあることが分かった。

(2) 個別動詞の傾向: このように、コーパス全体でみると「…なさる」が全体の過半数を占め、和語起源のものも (3)b に示されるように数多く存在する。これは、一見すると (2)b に示した容認度判断とは食い違う。この原因として、「…」のスロットにどのような動詞が現れるかで尊敬語構文の選択傾向が変わり、「…なさる」を取りやすい動詞の頻度がコーパス全体で高かったことが考えられる。この予測を確かめるために、今回の調査で粗頻度が 30 以上出現した 74 の動詞たちが、実際、どのような割合で三つの構文を選択しているのかを散布図の形で表した。これが図 1(a) である。

全体の傾向「40.24%: 50.11%: 9.64%」に対応する点は、*で示されており、四角の各点が和語起源の動詞、丸の各点が和語以外の起源の動詞に対応している。「…なさる」を強く志向する動詞から「御…になる」を高頻度で選択する動詞までが、連続的に分布しており、和語動詞が「…なさる」を取りにくいわけではないことがわかる。

(3) **Sentence Mood** の影響: それでは、和語動詞が一般的に「…なさる」を取りにくいという (2) の容認度判断は誤りなのであろうか。(2)b と図 1(a) の食い違いは、実は、Sentence Mood という別の交絡要因からもたらされている。「御…になる」では命令形で使われることはまれであり、和語動詞も「ちょっとお待ちなさい」「そうむきになりなさんな」のように命令文であれば「…なさる」を選択する。命令文か否かによって散布図を描きなおしたものが図 1(b) と (c) であり、命令文では「…なさる」／「御…なさる」が、非命令文においては「御…になる」が多くの動詞で選択されることが視覚的に確認できる。

(4) 音韻制約 / **suppletion** / レジスター: しかし、図 1(b) では、数点、非命令文であるにもかかわらず、和語動詞 (四角) が「…なさる」を取る事例も伺える。これらは、(i) 「為 (す) る」「見る」「来る」「居 (い) る」「寝る」「言う」など連用形が一モーラになる動詞 (「御」は二モーラ以上の語につくという音韻制約がある)、(ii) 「行く」のように特別な尊敬語形式をとるもの、(iii) 「(気を) 付ける」のような定型表現の頻度が高いものにあてはまる。(iv) また、「名前は何といいなさるんで」「よう来なすった」のように、方言 / 古風な言い回しでの運用が多く、「ナサル尊敬」が「ナル尊敬」に比べ古くから使用されていた事実を反映するものと考えられる (辻村 1974)。

3 推測統計: 統計モデリング

だが、上記の記述統計的な解釈には限界もある。第一に、どの要因が最も効果量が高いのかという点が不透明である。第二に、標本を越えた母集団の性質を吟味する必要がある。そこで、推測統計学的な知見からデータを改めて分析する。紙幅の都合上、ここでは「…なさる」と「お…になる構文」の構文交替に焦点を絞り、Yamada (2019) で提案された手法に倣い二項ロジスティック回帰をベースとした一般化線形混合効果モデルを複数立て、その中で最良だと判断されたモデルに解釈を施す。

3.1 変数: 本研究で用いる予測変数および応答変数は以下の通りである

(5) 考察対象の変数

- a. 予測変数 1 x_1 : Sentence Mood (非命令文 (= 0) / 命令文 (= 1)) (固定効果)
- b. 予測変数 2 x_2 : 和語動詞のモーラ数 (1 か (= 0)、2 以上か (= 1)) (固定効果)
- c. 予測変数 3 u_k : レジスター (変量効果)
- d. 予測変数 4 v_j : 和語動詞の語彙素 (変量効果)
- e. 応答変数 y : 尊敬語構文 (「御…になる」 (= 0) / 「…なさる」 (= 1))

3.2 モデル比較

(1) **Null Model**: $y_i \sim \text{Bern}(\pi); \text{logit}(\pi) = \beta_0$ (AIC: 10, 326.8; BIC: 10, 333.7)
各観測値 $y_i \in \{0, 1\}$ がパラメータ π のベルヌーイ試行に従い π はどのような要因からも独立だと仮定する Null Model の AIC は 10, 326.8、BIC は 10, 333.7 である。

(2) 比較対象: (i) 各要因を含めるか否か、(ii) リンク関数に何を使うか (ここでは、logit, probit, cloglog の三つを検討した) によって、 $2^4 \times 3 = 48$ 通りのモデルが想定される。こ

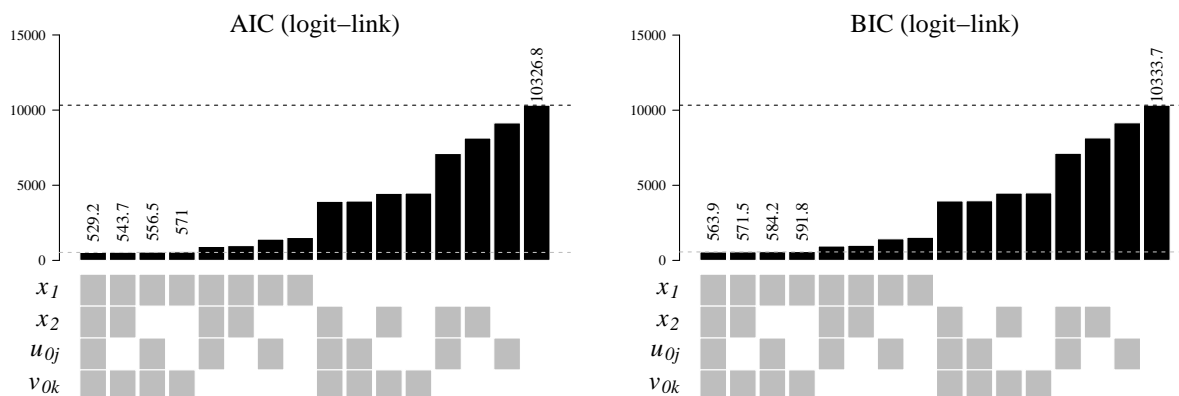


図 2: Logit リンク関数を用いた 16 個の統計モデルの AIC/BIC

固定効果	推定値	標準誤差	z-値	Pr(> z)	変量効果	分散	標準偏差
$\hat{\gamma}_{00}$ (Intercept)	3.247	1.664	1.951	0.051	$\hat{\sigma}^2$	1.538	1.240
$\hat{\beta}_1$ (imp)	12.870	1.362	9.446	3.54e-21	$\hat{\tau}^2$	8.589	2.931
$\hat{\beta}_2$ (mora)	-7.188	1.653	-4.349	1.37e-05			

表 1: 推定結果

これらのモデルをすべて構築し、AIC と BIC の下で最良のモデルを選択した。

(3) 最良のモデル : logit リンクで (5)a-d のすべての変数を投入したモデル、すなわち、(6) のモデルが最小の AIC、BIC を示した (logit リンク関数を用いた 16 個のモデルの AIC、BIC は図 2 に記している)。最良のモデルの推定結果は表 1 にまとめられている。

(6) $y_{ijk} \sim \text{Bern}(\pi_{ijk}); \text{logit}(\pi_{ijk}) = \beta_{0jk} + \beta_1 x_1 + \beta_2 x_2; \beta_{0jk} = \gamma_{00} + u_{0j} + v_{0k}; u_{0j} \sim N(0, \sigma^2); v_{0k} \sim N(0, \tau^2)$ (AIC: 529.2; BIC: 563.9)

3.3 解釈

第一に、モーラ、命令文は共に重要な予測変数だが、より高い効果量を持つものは後者であった。これは、 x_1 の投入が他の変数を複数入れることよりも情報量基準を下げるという図 2 の結果からも伺える。第二に、語彙素における分散は、レジスターにおける分散よりも大きい。以下、それぞれの変量効果の推定値が大きいものに注目し、モデルからは予測できない独自性を備えたものを考察する。

(1) 個別動詞 : 各動詞のランダム効果の推定値は、表 2 にまとめられている。

A. 「御…になる」指向の独自性を持つもの : 符号が負であり、絶対値の大きな動詞は、動詞の独自の傾向として「御…になる」を強く指向する動詞と特徴づけられる。そのような動詞に「出でる」「見える」「話す」「使う」などが存在する。^{*1}動詞「出でる」の特異性は、

^{*1} 「出る」は、BCCWJ 上で「出でる」と混同された事例が多く、「一モーラ」でありながら「御…になる」を取ると誤分析されたものが多い。「持つ」は、コーパスの誤解析によって条件節の「御…になる」が「命令形」と判断されてしまった事例がある。この結果これらの動詞で高い値が出たものと考えられる。

出る	-5.82	越す	-1.52	座る	-1.09	立つ	-0.25	作る	0.75	居る	1.76
持つ	-4.65	決める	-1.51	求める	-1.05	止す	-0.25	上がる	0.80	食べる	2.02
出でる	-3.08	止める	-1.44	休む	-0.86	有る	-0.14	見る	0.96	返る	2.40
見える	-2.62	答える	-1.44	任せる	-0.83	表わす	-0.13	飲む	0.97	置く	2.44
話す	-2.09	受ける	-1.43	読む	-0.79	出す	0.10	掛ける	1.20	考える	2.60
使う	-1.90	呼ぶ	-1.42	会う	-0.75	遣る	0.12	入れる	1.30	貰う	2.85
尋ねる	-1.86	聞く	-1.41	捨てる	-0.74	寝る	0.14	為る	1.31	仕舞う	4.13
知る	-1.79	示す	-1.32	述べる	-0.61	与える	0.15	入る	1.32	行く	4.76
戻る	-1.74	亡くなる	-1.23	出掛ける	-0.59	待つ	0.19	成る	1.33	言う	4.90
分かる	-1.58	買う	-1.18	話す	-0.48	忘れる	0.39	上げる	1.57	呉れる	4.95
召す	-1.58	認める	-1.13	書く	-0.44	取る	0.60	来る	1.65	付ける	5.08

表 2: 各動詞のランダム切片の推定値

その古語性、すなわち、二モーラ制約のある「御…になる」でのみ化石化することができたという点に求められると考えられる。動詞「見える」は「先生には、人の心がお見えになる」のような can see の意味での使用に加え「先生が{お見えになる/??見えなさる}」のように、come, go の意味で慣用化した用法が存在するために、相対的な頻度の向上をもたらしたと考えられる。「話す」についても、意味の透明性の高い「先生が壇上でお話になる」という用法に加え、「バイトでダメとかお話になりません」のような慣用的な意味が創発し、「御…になる」への依存度が強まっているのだと解釈できる。

B. 「…なさる」指向の独自性を持つもの：正の符号を取り絶対値の大きい動詞には「呉れる」「仕舞う」「貰う」「置く」など補助動詞指向のもの、および「付ける」「言う」「行く」「考える」「返る」「食べる」などがある。第一に、補助動詞が固定効果（命令文の効果、モーラ数の効果）をコントロールされた下で「…なさる」を指向するという点は、「御…になる」が本動詞ほどたやすく補助動詞に接合することができないという点、すなわち、内容語（名詞／動詞の連用形）につく用法から発達した接辞「御」が文法化が進んだ補助動詞には接合しにくい点に由来するのではないかと考えられる。第二に、動詞「付ける」は、本コーパスで「気を付ける」という表現で多用され、「付ける」のみを尊敬語化した「気をお付けになる」という言い方が避けられるため「…なさる」への依存度が相対的に高くなっていると考えられる。第三に、その他の動詞の独自性については、明確な理由づけに困難を感じ詳細を将来の研究に委ねたい。非命令形における使用が少なかったため値が大きく出た可能性のある動詞もあるが、「言う」などは非命令形でも「言いなさる（23例）」「お言いになる（5例）」と明確に前者を指向する傾向を見せ背後に何らかの理由がするのではないかと疑われる。

(2) レジスター：強い負の推定値を示したのが「国会議事録 (-2.21)」であり、最も強い

正の値を示したのが「新聞 (1.27)」である。その他は-0.43 から 0.79 の間に落ち着いている。「国会議事録」には和語動詞が「…なさい構文」で 192 例、「御…になる」で 774 例存在するが、非命令文での頻度がはそれぞれ 0 例、774 例で、非命令形で「…なさい構文」が避けられていることがわかる。理由は今後の研究に委ねたいが、(1)b で見たように容認度が下がる文の使用はフォーマルな場で避けられている可能性がある。地の文で素材敬語が少ない新聞は、事例は総数で 19 例、内 15 例が「…なさる」（直接話法での使用が多く 14 例が命令形）と標本が少なく、偶然、値が強めに出た可能性がある。

4 まとめと意味合い

本稿は、一般化線形混合効果モデルを用い、確率的構文交替を分析する手法について指針を示した。和語動詞では、①命令文、②モーラによって尊敬語構文選択が変わること、また、これらの要因が統制された後に残る個別動詞の独自性については「御…になる」において創発する慣習性と多くが結びついていることを指摘した。一方、レジスターにおける独自性については、方言／古めかしさという 2.2 節の観察の他、フォーマリティーが関係している可能性 (3.3 節) も示唆されたが、詳細な関係については、異なるコーパスの利用、実験、内省研究との統合によって今後研究されることが求められる。

謝辞：本研究は国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学的観点から見た日本語の音声と文法」の研究成果の一部である。

参考文献

- Boeckx, C. and F. Niinuma (2004) Conditions on agreement in Japanese. *Natural Language and Linguistic Theory* 22, 453-480.
- 菊地康人 (1997) 『敬語』講談社学術文庫
- Kishimoto, H. (2010) Honorific agreement in Japanese. *The Canadian Journal of Linguistics/La revue canadienne de linguistique* 55(3). 405-415.
- Niinuma, F. (2003) The syntax of honorification. Doctoral dissertation. University of Connecticut.
- Thompson, A. (2011) Irregularity in Japanese honorifics. Linguistics Research Center. UC Santa Cruz: Festschifts.
- 辻村敏樹 (1974) 「明治・大正時代の敬語」『明治・大正時代の敬語』明治書院
- Yamada, A. (2019) A quantitative approach to addressee-honorific markers. 『計量国語学』32.
- Yamada, A. (to appear) Syntax, semantics and pragmatics of Japanese addressee-honorific markers. Doctoral dissertation. Georgetown University.